

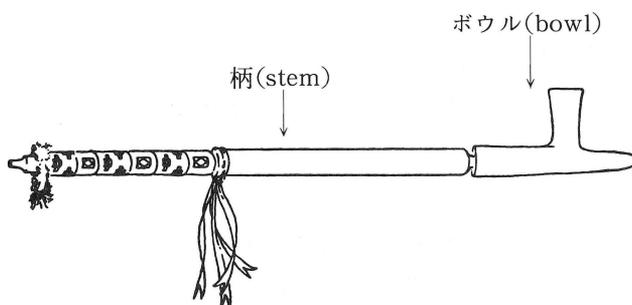
## 聖なるパイプとホワイト・バッファロー・カーフ・ ウーマンの“聖なる伝承”<sup>1\*</sup>

浜 由美子\*\*

### I はじめに

パイプというのは、アメリカやカナダのインディアンが祈りを神に伝える媒介として使う道具である。パイプバッグの中に大切に保管され、聖なる儀式であるスウェット・ロッドやサン・ダンス<sup>2</sup>などで、また、グループや個人で祈る際に単独で使われる。ラコタ族 (Lakota)<sup>3</sup> のメディスン・マンである Archie Fire Lame Deer (1935-) は、インディアンにとってのパイプの意義と起源を次のように『力の贈り物 (Gift of Power)』の中で述べている。

聖なるパイプなしに儀式は語れない。パイプを吸わない儀式はない。... パイプから立ち上る煙は、人間を人間以上のものと結び付けてくれる。パイプには力がみなぎり、それは単なる木と石ではなく、生きているものとなる。... パイプはインディアンの心である。赤いパイプストーン<sup>4</sup>のボウル ータバコの詰め口<sup>4</sup>は血と肉である。柄は脊髄であり、体である。立ち上る煙はワカン・タンカ (Wakan Tanka)<sup>5</sup>の息である。... パイプを手を持つ時、嘘はつけなく、真実のみが語られる。... しかし、パイプ自体が聖なるものというわけではない。それをどう使うか ... 儀式で使い、祈りを込め、祝福されてはじめて、聖なるものとなる。ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンがパイプをもたらした話は何世代にも渡って語り継がれてきた。(201-202)



The Sacred Pipe より

このように大事なパイプがいかにしてインディアンの手に渡ったかに関してはさまざまな言い伝えがある。全てに共通しているのは、パイプが、全平原インディアン

\*The Sacred Pipe and the Sacred Story of White Buffalo Calf Woman

\*\*Yumiko HAMA, the Course of English Language & Literature

の儀式で使われ、インディアンの行為の中心であり、大地と空、見えるものと見えないもの、肉体と精神の架け橋となるものであるという点においてである。違いは、異なる部族に異なる使者によってもたらされたことである。Blackfoot 族にパイプをもたらしたのは雷、Arapaho 族にはアヒル、Cheyennes 族に矢のパイプ包みをもたらしたのは、予言者 Sweet Medicine であると言われている(Freesoul, 12)。しかし、圧倒的に多くの部族にとり、それはホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマン<sup>6</sup>である。

ラコタ族に伝承されてきたこのホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンに関する“聖なる伝承”はインディアンには歴史的事実として信じられていると言える。インディアンの精神世界を広く説いているラコタの Ed. McGaa, Eagle Man は、『母なる大地の精神性 (Mother Earth Spirituality)』の中で「ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの出現を伝説や迷信と考えるのはインディアンにとっては誤りである。…他の指導霊とのバランスをとり、必要な調和をもたらしてくれる存在であるから」(6)と述べている。パイプを神聖さの象徴としてもたらしたこの女性は、ラコタ族や他の多くの部族にとり精神性の要となっている。最も聖なる、重要な儀式と言われるサン・ダンスはこの“聖なる伝承”を再現し、パイプを通して祈る儀式と言ってもよいだろう。

何世代にも渡って広く語り継がれてきたこともあり、この“聖なる伝承”にはさまざまな語りがある。ラコタの聖人 Black Elk (1863-1950) の語ったことを纏めた『聖なるパイプ (The Sacred Pipe)』や、それを基に美しい挿し絵入りの本にした『聖なるパイプの贈り物 (The Gift of the Sacred Pipe)』を始めとして、ラコタの精神世界を語る多数の本や児童書<sup>7</sup>に語られている。

本稿では、ラコタ族の精神世界の復興をもたらした「賢者・予言者・治癒者・聖人」(Allen, 108)と言われる Black Elk が、文化人類学者 Joseph Epes Brown に伝えた語りをまず II 章で見してみる。それから、種々の語りとの異同を検討し、その意義を考察する。次に、III 章で、最初に授与されたパイプがどのように継承され、いかに使われているか、そして、一般に現在インディアンの間でどのようにパイプが使用されているかを検討する。IV 章では、筆者の体験に基づいて実際にどのような形でこの“聖なる伝承”がサン・ダンスで再現されているかを見してみる。最後に、V 章でホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの我々へのメッセージを考察する。

## II ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの“聖なる伝承”

ここでは、まず Black Elk の全語りを見てから、他の語りとの違いを簡単に取り上げ、整理、考察してみる。

### 1 「聖なるパイプの贈り物」：Black Elk の Brown への語り(1948年)<sup>8</sup>

何冬も前のこと、ある朝早く二人のラコタが弓矢を持って狩に出かけた。獲物を探して丘の上に乗っていると、はるかかなたから見たこともないような素晴らしいものが彼らの方へ向かってきた。この不思議なものがさらに近付いた時、それが、白いバックスキンの服を着、包みを背負った非常に美しい女性であることが分かった。この女性があまりに美しいので、一人の狩人はみだらな欲望を抱き、それを友に告げた。しかし、善良なるこの友は、「そんなことを

考えてはいけない、これは、神から遣わされた女性だ。」と言った。この神秘に包まれた女性はすぐ側まで来て、欲望を抱く男に近寄るようにと言った。この若者が女性に近付くと、二人は巨大な雲に覆われてしまった。すぐに雲は上がり、聖なる女性はそこに立っていたが、よこしまな考えを抱いた男はその足下に骨と化しており、恐ろしい蛇の餌食となっていた。

「今起こったことを見ましたか！」とその不思議な女性は善良なる若者に言った。「私はあなたの方のところへ来たのです。酋長 Hehlokecha Najin (Standing Hollow Horn) に話があります。その元へ帰り、皆が集まれるぐらい大きいティーピー - インディアンのテント - を用意



*The Gift of the Sacred Pipe* より

するように言いなさい。そして私を迎える準備をしなさい。とても大事なことを伝えなければなりません！」

若者は酋長のティーピーへ行き、起こったこと全てと、この聖なる女性の来訪に備えて準備すべきことを語った。酋長はティーピーをいくつか取り払い、指示通りにそれで大きなロッジを作った。そして、一番良いバックスキンの服を着て直ちにロッジに集まるように、部族中に伝えた。皆は、大きなロッジで聖なる女性の到来を待ち受けながら、興奮状態の中でこの神秘的な女性がどこから来て、何を伝えたいのかと訝った。

聖なる女性の到来を見張っていた若者がこちらへ美しい歩調でやってくるものが遠方に見えると。と、突然彼女はロッジの中において、太陽の動きと同じ方向に歩いて、酋長の前に立った。背から荷物を下ろし、酋長の前にそれを両手で捧げ持ち、「これをよく見て、大切にしなさい。非常に聖なるものですから、そのように扱わなければならないし、穢れた人には見ることさえ許可してはいけません。この包みの中には、聖なるパイプがあります。これを使って、冬の間、父であり祖父であるワカン・タンカへあなた方の声を送りなさい。」

神秘的な女性はこう言った後、包みからパイプと小さな丸い石を取り出し、石は地面に置いた。パイプの柄を天に向けて持ちながら続けて語った。「この聖なるパイプを持って大地を歩きなさい。大地は祖母であり母であり、神聖なものです。大地を踏みしめる一步、一步を祈りと共に歩まなければなりません。このパイプのボウルは、赤石でできており、大地を表しています。この石に柄の方向に彫ってあるバッファロー・カーフは、母なる大地に住む全ての4つ足を表しています。パイプの柄は木でできており、大地に育つ全てのものを表しています。柄とボウルの継ぎ目に付けてある12本の羽は斑点鷲 (spotted eagle)<sup>9</sup>の羽で、鷲や空を飛ぶ羽のあるものを表しています。これらのもの、宇宙のあらゆるものが、パイプを吸う人と繋がり、全てのものが大いなる霊ワカン・タンカへその声を送れるのです。このパイプを使って祈る時、全てのもののために、全てのものと共に祈ることになるのです。」

聖なる女性は、地面に置いた丸い石にパイプの柄の先を触れ、話を続けた。「このパイプでもって、全ての縁あるもの (all your relatives)<sup>10</sup>、祖父、父、祖母、母などに繋がれるのです。パイプのボウルと同じ赤石でできているこの石<sup>11</sup>は、父なるワカン・タンカよりの贈り物です。これは、祖母、母である大地であって、そこがあなた方が生活し繁殖する場所なのです。創造主が与え賜うたこの大地は赤です。大地に住む2本足は赤、また、大いなる霊は赤い日と赤道<sup>12</sup>を与えてくれました。これら全てが神聖なものであるということを忘れてはなりません。毎朝訪れる夜明けは聖なる出来事であり、毎日を聖なるものとしてくれます。光は父なるワカン・タンカから来ているからです。そして、2本足とこの大地に立つ全ての人々やものが神聖なものであり、そのように遇されなければならないのだということをいつも覚えていなさい。

今後、聖なるパイプはこの赤い大地にあり、2本足はパイプを取って、ワカン・タンカへその声を送るのです。この石に描かれている7つの輪には大切な意味があります。それはパイプを使う7つの儀式を意味しているのです。最初の大きな輪は、私がこれから伝授する最初の儀式を表し、後の6つの輪は、やがて直接あなた方に示されます。<sup>13</sup> 酋長よ、これらの贈り物とあなたの民を大切にしなさい。このパイプを使うことにより、2本足は繁栄し、全ての良いことがやってきます。天上からワカン・タンカがこの聖なるパイプを賜ったのです。あなた方が智

恵を授かるようにです。この大きな賜物に対していつも感謝しなさい。では、お別れする前に、このパイプを使う最初の儀式<sup>14</sup>を伝授しましょう。

あなた方の誰かが亡くなった日は聖なる日としなければいけません。これから教える通りにその魂を留めておかなければなりません。それにより大きな力が得られます。なぜなら、死者の魂をここに保持できれば、それは隣人への思いやりや愛を増大してくれます。その人が、魂として、共にあれば、その人を通してあなた方の声をワカン・タンカへ送れるのです。

魂を解き放ち、ワカン・タンカのもとへ帰す日<sup>15</sup>は聖なる日としなければなりません。この日には4人の女性が聖女とされ、皆の手本となるような、人生の道を清く生きる子供をやがて産むでしょう。私を見なさい。彼らが口にするのは私だから、彼らは聖なるものとなれるのです。

亡くなった人の魂の保持者は善良で、清くなければなりません。魂と共に皆の声がワカン・タンカに届くようにパイプを使うからです。パイプを使うことにより、母なる大地の賜物や実を結ぶ全ての賜物が祝福され、皆が聖なる道を歩めるのです。声を届けるのにワカン・タンカより7日間与えられていることを忘れないで下さい。これを覚えている限り、生きていけます。後は、ワカン・タンカより直接示されるでしょう。」

聖なる女性は、ロッジから退散し始めたが、酋長をもう一度振り返って言った。「このパイプを見なさい。いかにこれが聖なるものかいつも覚えておき、そのように遇しなさい。それはあなた方をちゃんと最後まで連れていってくれます。私には4つの時期<sup>16</sup>があることも覚えておいて下さい。もう帰りますが、どの時期にも私はあなた方を振り返り、最後には戻って来ます。」

右回りにロッジを回って、神秘的な女性は出て行った。しばらく行くと振り返って腰を下ろした。立ち上がった時、人々が驚いたことに彼女は幼い赤茶のバッファロー・カーフになっていた。もう少し行ったところで再び横になり、皆を振り返りながら体を地面にこすり回した。立ち上がった時には白いバッファローに変身していた。更に遠くへ行き、再び体を地面にこすった時には、黒いバッファローに身を変えていた。このバッファローは、さらに遠くへ行き、立ち止まり、宇宙の4方向へおじぎをした後、丘の向こうへ消えて行った。(Brown, 3-9)

## 2 ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの“聖なる伝承”：他の語りと Black Elk の語り

1948年に Black Elk が Brown に語った上述の語りには、パイプの意義、パイプは7つの宗教儀式の中心であること、そして、赤石に描かれてある7つの輪はこの儀式を象徴していること、儀式の方法などが、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの神秘的到来と共に語られている。しかし、これは、彼が16年前の1932年に詩人 John Neihardt に語ったもの<sup>17</sup>とは異なっている。Neihardt に語るによりラコタの精神世界を初めて外部に明らかにし、その復興、および、他部族のアイデンティティー回復にも寄与した Black Elk は、その時点では、もっとうずと簡潔に語り、“魂の保持 (Keeping the Soul) の儀式”とパイプの長短が順境・逆境の指標となることを述べたのだが、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンが帰ってからのこととして、次のような補足をして話を終えている。

数人の狩人が出かけて、バッファローを一頭捕った。時は春、バッファローが子牛を子宮の中に孕んでいる時のことであった。内臓を出してみると子牛がおり、子宮を切り開いてみると、驚いたことに、中に人間がいた。老婆のように見えた。髪は真っ白であった。男は全員そこに集まって、それを見た。80年前のことである。(DeMallie, 1984: 285)<sup>18</sup>

“内蔵に子牛”，“子宮の中に老婆”というのは、「4つの時期がある」と後に Brown へ言ったことと重なるのであろうが、後の語りの方がより啓示的であると言える。この語りにおける変更は、後で考察するが、Black Elk の神学的枠組みの中での伝統回帰に起因するのであろうと思われる。

1948年の Black Elk の話が一番膾炙しているが、Paul B. Steinmetz (54) は Black Elk のものを入れて11の語りがあると考えている。それらは、1890年代から1960年代までに採取されたもので、詳細において異なるだけでなく、重要な特徴や意味においても異なる。筆者が入手したものは、その内の5の語りとそれ以降のもの11である。

他の10の語りの重要な違いだけを、Steinmetz の説明(54-57)も入れて、簡単に見てみよう。<sup>19</sup>

- ① Finger の語り (1914年)：女は長い髪がローブのように体にかかっていたという以外衣服をまもっていなかった。ティーピー内では美しい服を着ていたが男たちには頭を垂れて地面を見つめているように言った。これに反した一人の男は目に黒い煙が吹きかかり、その後ずっと目が痛かった。彼女は子供、次に女性、それから、男に、用意させた正餐を与えた。彼女は“美しいもの (Wohpe)”であり、何日も滞在した。(Walker, 109-11)
- ② Thomas Tyon の語り (年不詳)：女はとても美しく、髪は長く何も着ていなかった。(Walker, 148-50)
- ③ Sword の語り(1938年)：最も詳しい語りである。女はパイプを3回渡す振りをして4回目に実際に渡した。<sup>20</sup> 4日滞在し、7つの儀式を教えた。食べてもいい物、食べてはいけない物などを具体例を挙げて指示し、部族のあり方、指導者の義務に加えて、部族の者は友とし、他部族の敵は敵とすること、戦は善行であることなどを語った。(Powers, 49; Deloria, 21-23)
- ④ Iron Shell の語り(1964年)：女はバッファローの民の代表として訪れた。スー族は神に喜ばれており、彼女もラコタの姉であることを誇りに思っていると言った。女、子供、男へはそれぞれの役割、酋長へはパイプの扱い方の話をし4日間滞在した。去る前に、パイプに火を付け、空、大地、4方向に捧げた。(Hassrick, 257-60)
- ⑤ Ernest Two Runs の語り(年不詳)：女が去った後にバッファロー狩に出かけた時バッファローの群の中に女性を見つけた。その女性を殺して、耳を切り取って、カーフ・パイプに付けた。彼女が耳で聞いたこと全てがその世を表すことであるというのである。(Mekeel, 3)
- ⑥ Percy Phillips の語り(1908年)：女は、パイプの力によって死ぬことになる最初の敵の耳を切り取りパイプの柄につけ、最初に剥いだ頭もそうするべきであると語った。パイプ到来後、数日してキャンプ内に2名が死ぬ争いがあった。彼女の命令に従って、一人の耳を切って、頭皮とともに、パイプの柄につけた。パイプには今でもその耳と頭皮が付いて

いる。(Dorsey, 327-28)

- ⑦ John Smith の語り(1967年)：女は背の籠から6本の弓と矢を取り出し、勇気と誠実さで知られる6人の若者に渡した。そして、600頭のバッファローが草を食べている丘へ行くように言った。この群れの中に6人の男がいるから、この男を殺して、耳を切り取り、聖なるカーフ・パイプに付けるように言った。(Smith, 3)
- ⑧ Captain J. M. Lee の語り(1896年)：一人の狩人は女が同部族ではないという理由で殺そうとした。彼女はパイプの目的は部族内の平和を樹立することであり、部族の者を殺す者はパイプを吸ってはいけないと語った。(Mooney, 2 : I 062-63)
- ⑨ Lone Man の語り(1918年)：この語りにはスピーチが多い。酋長が女を迎えるスピーチをした後、彼女がまず全部族へ、そして、女、子供、男、酋長へそれぞれ日々の生活に関する長いスピーチをした。他の部族との友好の道具としてのパイプの役割も話した。(Densmore, 65-66)
- ⑩ Garrick Mallery の語り(1893年)：女はパイプとともに小さな包みを渡した。それにはとうもろこしが4粒入っており、白、黒、黄色、まだらであった。彼女は自らをバッファローだと名乗った。人々が生きられるように大地にミルクをこぼすと言った。(Mallery, 290)

以上が、他の語りである。最近記されたものは、1948年の Black Elk を基としてそれに情景や詳しい描写を加えたもの、スイートグラス、セージやバッファローの頭蓋骨など儀式に使用するものの使い方を述べているもの、および、誰その語りとして伝承の出典を明らかにしたものなどがあるが、総じて説明的描写が多くなっている。

これらの語りを整理してみる。彼女が誰かということに関しては、Whope か、バッファローの民からの使者となっている。Black Elk の語りで、魂の保持の儀式に関して“子供が口にするのは私”と語っていることから、彼は彼女をバッファローの遣いと考えていたと思われる。ラコタの神話では、どちらにしてもワカン・タンカの遣いであることが分かる。“美しいもの Whope” は、ワカン・タンカの中でも創造主として最高権を持つ空の神 Skan の娘で、大地に4方向を決めるときに、流れ星となって世に降り、人となり、4方向の守護者となるべき兄弟を助けるために、妹として来た。彼らは、後に4方向への祈りをワカン・タンカへ取り次ぐ霊となり、Whope はその中の一人である南風 Okaga の妻となった。その頃下界にいたのは“バッファローの民 (Pte Oyate)”であったが、その中の何人かがバッファローに助けられて、ラコタの先祖と言われる最初の間人 Ikce Oyate (Real People) としてこの世に誕生した。<sup>21</sup>どこまで創世神話を遡るかは異なるが、元をたどっていくと、Pte Oyate, Whope へといくのである。①の語りで「用意させた正餐を与えた」とあるが、Whope の役割は食事を供することであった。また、④の語りで彼女が「ラコタの姉」であると言ったこともラコタとバッファローの民との関係を考えれば明らかである。

また、①、②の語りで、女は魅惑的裸身なのだが、それは大きな誘惑にどう対処するかを試練を象徴しているのであろう。負けた者は死の罰を受けたのである。どこまで読み込むかは疑問であると考えるが、Royal B. Hassrick は、彼女が、母や姉を象徴しており、彼女に対しての

性欲を男性は死の罰で昇華しなければならぬ女性の親族であるとして、「欲望を抱いた狩人は抑えがたい欲望のためと言うより、タブーを破ったことや冒瀆を犯したために死んだ」(262)と言っている。ラコタ神話に、Whopeへ兄として欲望を抱いた長男はそのためもあり家督権を失った(Dooling, 67)とあることとも重なる。

⑤～⑦はいずれも死者の耳を斬る。⑥で今も付いていると言っているのは、Black Elkを継ぐラコタの聖人 Fools Crow (1890-1989) のオリジナルパイプの描写 (Malis, 203) と一致する。⑤は彼女を殺して時代の証人を、⑥、⑦は人前に晒すことで嫉妬や争いへの戒めを表しているであろう。また、③、⑧を含めて、これら⑤～⑦の語りは、18世紀末のチプワ族との抗争、1850年代から1890年の Wounded Knee の大虐殺という惨事に至るまでの連邦政府や移植者との戦闘の時代をも反映していると言えるだろう。

4 という数は、「聖なる4方向」が示しているように、インディアンにとり聖なる数である。神秘的な女性、赤茶、白、黒のバッファローと4回違う姿で現れていること、4日滞在したこと、パイプを4回目に渡すこと、トウモロコシが4粒あったことなどにそれが示唆されている。

Black Elk の語りに加えて、これだけ多くの語りがあることの意味は何なのであろうか。Clyde Holler は違う語りは宗教的真実の理解度を増すことに意義があると次のように述べている。

伝統的な文化において、聞き手は、同じ話の違う語りを聞いた時、違いを認識はするのだが、文字通りには受け取らずに、語られている真実を、象徴的だと考える。二つの違う話を聞いた人には、認識上の混乱はなく、ただ、その話や宗教的真実が何であるかということへの理解が深まることになる。それぞれの話が、それなりに真実である、あるいは、それ自体の真実があると見なされると言ってもよいだろう。ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの話の主眼は、彼女がいつ来たかとか、これこれのことを言ったということではなく、この話を通して、聞き手が自らを彼女に意味あるように関連づけられるかにある。(Holler, 214)

このように、種々ある語りの変型は、聞き手を混乱させるのではなく、その理解を深めることになる。インディアンの神話や聖なる語りには、個々の「ビジョンと切り離せない」こと、および、「即時、聞き手の直接的関与を要求する」(Gunn, 105)という側面があることを考えれば当然のことだと言えるだろう。そして、その中核として共通しているのは全てのものへの尊崇の念、連帯感などである。話の各所に寓話的意味が多レベルにある。例えば、女性の年齢不詳性、その美しさ、処女性、戦国の時代における明白なる無防備性、邪念を抱いた狩人の死、キャンプで彼女に示された崇拜の念などであるが、それらに関して聞き手はそれぞれの宗教的真実を捉えると言えるだろう。

ここで、また、1948年の Black Elk の語りに戻って考えてみる。この語りの中心はラコタの7つの宗教儀式である。彼の語りには Sword 以外のものには欠けているラコタの儀式の重要性と共に、ラコタの伝統を、結果としてかもしれないが、キリスト教の枠組みの中に組み入れようとする試みが見られると言えるだろう。彼の語りは「彼の生活に統合されたラコタの信仰

とカトリックの信仰という2つの宗教的伝統に橋を架ける最後の試みを反映し、カトリックの秘蹟と重なる形でラコタの儀式を構築している。白人の宗教の力を見た彼は、伝統的宗教儀式、特に、ビジョンから来る癒しの儀式を捨てても、カトリックに改宗<sup>22</sup>し、死ぬまでカトリックであったが、老齢になった時、白人のために部族が失ったもの、すなわち、周りの世界と不可分に繋がっている精神の力を無くしたことを悲しく思い、ラコタの伝統に目が向いたということがあるだろう」と Raymond J. DeMallie (1984:71) は分析している。

この Black Elk の伝統回帰の意味を、Paul B. Steinmetz がさらに発展させて述べており、語りの主眼は、歴史的再構成にあるのではなく、主要なラコタの宗教儀式の神学的発展にある(57)と言っている。ただ、Ed. McGaa は、インディアン立場から、Black Elk の研究家が彼をあまりにキリスト教の視点から捉えていることを遺憾として、Black Elk は最終的にラコタの伝統に完全に転向したのだ(1995:16)と述べている。これらのことは、少なくとも、ラコタ族がその伝統を理解するようという Black Elk の使命感を表している(Brown, xv)と言えるだろう。そして、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンがパイプをもたらした時から、ラコタの間でパイプには特別な意味が付加され、サン・ダンス<sup>23</sup>など儀式には神からの啓示として与えられたという明確な証が付与されたと言える。

この神話は、ラコタの人々にとって、聖なるもの<sup>24</sup>の唯一の非常に重要な具現化した姿、すなわち、ラコタの世界の基礎を築き人々に時空を超えて民族としての方向性を示してくれたもの<sup>25</sup>のことを語っている。パイプがなければ、人々は人間としての存在に最も根元的なことが、全て欠如することになっていたであろう …。(DeMallie:1987,52)

パイプが「最後まで連れて行ってくれる」とか、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの「最後には戻ってくる」という言葉は、キリスト教の最後の審判、キリスト再臨と重なるようだが、ラコタ神話でも、最後には裁かれることが述べられている。これは、Black Elk と同様にキリスト教に改宗した多くのインディアンに対しても、キリスト教の信仰と伝統的信仰は矛盾するものではないということも伝えていると言えるだろう。<sup>24</sup>しかし、Black Elk がラコタの枠組みの中でしか後世に伝えられないと痛感したことは、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの伝えた大事なこと、この大地にある全てのものがワカン・タンカの下に繋がっているということへの認識と、全存在の連帯としての祈りであるだろう。さて、次章では、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンによりもたらされたパイプが、現在どこにあり、どのように使われているのかを考えてみる。

### Ⅲ 聖なるパイプ

聖なるパイプという時、それは、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンのもたらしたパイプだけではなく、現在多くのインディアンが祈りに使っているパイプをも含む。本稿冒頭に引用したように「どう使うか」が問題なのである。ここでは、最初にもたらされたパイプに関して検討してから、現在パイプをどのように取得し、使い、保持しているのかを考察してみたい。

## 1 オリジナルのパイプ：カーフ・パイプ

ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンによる聖なるカーフ・パイプの到来を歴史的事実とすると、そのパイプがいつもたらされ、どこにあるのかということになる。年代に関しては2説ある。オハヨー谷のパイプが非常に古いものであり、移動前のスー族がミシシッピー川東部でもバッファローを狩っていたという事実から、平原での狩猟時代以前にもラコタ宗教の重要な要素はすでにあったと言うことと、2枚の絵を根拠として、Garrick Mallery は、パイプの到来の時期を901~930年か931~1000年の間と類推している。しかし、John L. Smith は、入手可能な文献全てを厳密に検証して、この伝承は1785年から1800年の間に始まったと言う。(Steinmetz, 15)<sup>25</sup> この根拠の具体例は何も挙げられていないが、後者の場合には、時代的背景と神からの使者の到来の必然性が合致する。

「18世紀中期ラコタ族は、フランス軍から武器の供与を受けていたチプワ族により、五大湖の森林地帯から、果てしなく続く木のない平原へと移動を余儀なくさせられており、生活は厳しく、新たなことばかりであった。生活の糧としていた草木や動物はなく、人々は貧しく、肉体的にも精神的にも飢えていた。生き延びるには、世界観の転換が必要であった。森林地帯から平原へのこの難しい変革の時代に、女性の形を取って、“メシア”が現われた。」と Tilda Long Soldier (38-39) は言う。ラコタ族が特別にワカン・タンカにより選ばれて、聖なるカーフ・パイプを授与されたということが、いかにラコタに失われた誇りを取り戻させ、この苦境を乗り切るのに必要な力を与え、志気を高めたかは想像に難くない。

さて、オリジナルとして崇められている聖なるカーフ・パイプの現在の所在地だが、それはサウス・ダコタ州北部のシャイアン川居留地にあるグリーン・グラスのサン・アーク (Sans Arc) 族にある。血縁により受け継がれてきており、現在 Looking Horse Family が所有している。多くのメディスン・マンが、自分のパイプでもってカーフ・パイプの包みに触れるだけの目的で、グリーン・グラスへ赴く。その結果、グリーン・グラスはパイプを通して祈る全てのメディスン・マンの霊があるところとなっている。触れたことにより、彼らのパイプがカーフ・パイプと繋がっているからである。

このカーフ・パイプは特別な折に開けられ、最後は1985年頃に開けられた (Steinmetz, 15-16) と言われている。パイプ保持者はこの儀式により力を得ると言われるが、実際にこのパイプに触れた Lame Deer の話を次に引用する。

聖なるパイプは、まずバッファローの革で包まれ、それから赤い布で覆われた聖なる包みの中にある。それは、バッファロー・カーフの足の骨でできていて、7本の赤い鷲の羽が付いている。柄は鳥の皮で覆われている。包みの中には、ハリネズミのハリを飾った詰め棒 (tamper) や、3本のきれいな彫刻がしてあるカヌーの櫂もある。包みは大切に、丁寧に保存されている。台の上に載せてあり、毎日聖なる4方向に向けて捧げられている。パイプは今は脆くなっているので、もはや吸わない。しかし、私が手に取って、祈った時、非常な力が、体中に漲るのを感じた。ワカン・タンカの力がパイプにあることが分かる。飢え、困窮、ラコタ族に危険がある時、包みは開けられ、パイプが取り出され、見せられ、祈られる。パイプは何世代も、300年とも1000年とも言われるが、継承されてきた。系図も

分かっている。(205-06)

続けて、Lame Deer は、彼の父親がビジョンに従ってパイプを吸ったときの体験(1930年)を語っている。

祈るためパイプを持った時、自分の分身、肉の一部のような気がした。血がパイプの中に流れ出し、また、体の中に戻ってくるのを感じた。パイプが、血流の一部となり、手の中で生きているのを感じた。身体の隅々にまで力が漲ってくるのを感じ、考えられない程の幸福感に満たされ、涙が頬を伝って流れた。パイプにタバコを詰めて吸った時、息が煙と混じり、それが、創造主の息であるのを感じた。ワカン・タンカに完全に身を委ね、空気、風に身を任せた時自分が宇宙の中心にいるのを感じたし、また、その時同時にパイプを吸っている他のインディアンも同じ喜びを感じ、同じ力で満たされているのを身体の奥深くで感知した。これを全て、人の心で感じたのではなく、バッファローや鷺が大いなる霊を感じとるように感じ、全ての生き物、動物、植物と一つであると感じた。このパイプは、心の盲目を治してくれた。(Lame Deer, 209)

聖なるカーフ・パイプの力とその生命力、“全ての縁あるものとの繋がり”を実感できる言葉である。これは唯一のものであるが、カーフ・パイプの伝来以降インディアンに広く使われてきたパイプ一般に関して検討してみよう。

## 2 聖なるパイプ (一般)

聖なるパイプとして一般に使われているものには種々ある。全ての祈りのパイプが、聖なるもので、平和のパイプであり、幸福を促進するものなのだが、機能が異なる。部族のパイプ、所属グループのパイプ、個人のパイプ、社交のパイプ、部族会議のパイプがあるし、サン・ダンスのパイプ、結婚のパイプ、戦争のパイプもあれば、パイプ・ダンスもある。

祈りのパイプは、儀式的道具であり動く祭壇である。インディアンの友人は、移動の際にはパイプをすぐ側に置き丁重に扱っている。儀式では、パイブラックというものに掛ける。<sup>26</sup>そこに掛ける時、パイプは焦点が定まり、集中力の中心、祭壇となる。吸わない時は、ボウルと柄は別に分けてそれぞれ包み、パイプバッグの中にパイプ儀式に使うタバコ、セージ、スイート・グラスなどと一緒に入れておく。

「パイプは買うものではない。自分で作るものだ」と Lame Deer は言う。「赤いパイプ・ストーンを長いこと持ち歩き、触り、感じているうちに、彫り方を知らせてくれる夢を見る。自分で彫って、自分の魂を彫り込む。それから、儀式に持って行って、聖人に祝福してもらう。それで、パイプは聖なるものとなる。パイプはあなたのものというより、生きている全てのものなのであって、あなたは、それを持つこと、聖なるやり方でそれを使うことを任されているだけなのだ。」(212-13)

このように自分で作るか、あるいは、教えを受けたり、良い働きをしたりしてパイプを授かるに相応しい者となることにより授与されるものである。パイプの所有者はパイプ所持者

(pipe holder)とかパイプ運び人(pipe carrier)と言われるが、彼らにとり人生における第一義は感情、言葉、行いにおける純潔である。そして、そのような人として尊敬され、パイプ儀式を司るように依頼される。これは神聖なる責任であり、個人的理由よりも優先されるのだということが、筆者がパイプ贈呈式<sup>27</sup>に出席した際、明確に伝えられていた。

「パイプとそれが象徴するホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの教えは、先住インディアンの人生観の一部である。全存在の根源と中心は、大いなる霊であると同時に全ての創造物にある霊である。存在するもの全てが生きており、存在するもの全てが関連しており、同じ根源、同じ息を共有している。植物、動物、岩、人間全てが呼吸している。風も、土も呼吸している。母なる大地や自然は創造主の呼吸が見えるようになったものである。祈りのパイプを吸いながら、この事実を認識し、それに集中する時、大きな変化が起こる。煙が聖なるものとなるのである。我々全てにある神の霊が聖なる煙として具現する。ここに、真の自己実現がなされ、精神世界との真の交流が認知され、それとの一体感を体験するのである。」(Freesoul, 12-13) このような意識の回復が、現在先住民社会が抱える種々の問題解決を助ける鍵<sup>28</sup>の一つとなるものであると言えるだろう。

聖なるパイプは民族の輪の中心である。それなしに命はない。パイプでもって子供を育て、アルコール中毒患者・麻薬中毒患者のカウンセリングをし、仲たがいを解決し、苦しむ者を癒し、サンダンスで生を祝福する。さらに重要なことに、パイプはビジョン・クエストで大いなる神秘に向き合う時携えて行ける唯一の道具でもある。聖なるパイプは道具の中の道具、全ての平原インディアン部族の間で一番強力な、一番大事にされている贈り物である。(Freesoul, 15)

パイプが現代のインディアン社会において持つ重要性を考察したところで、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンのサン・ダンスでの役割を見てみよう。

#### IV サン・ダンスにおけるホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマン

D. M. Dooling はラコタ神話集『風の息子たち (*The Sons of the Wind*)』の最終章「エピソード：聖なるパイプ」を次の言葉で終えている。「人々は今も教えられた通りにパイプを使っており、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンはサン・ダンスの全ての儀式におり、ダンスのリーダー、聖なるパイプのキーパーである。」(136) なぜそう言えるのか、筆者の参加体験から、サン・ダンス<sup>29</sup>におけるホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの役割を簡単に述べてみる。サン・ダンスを語ることは、本稿の目的ではないので、“聖なる伝承”との関わりの部分だけを取り上げることとする。

サン・ダンスの2日目、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの東からの到来により最初の踊りが始まる。東口からアーバー・ダンス・グラウンドーに入ってきたホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンは太陽の動く方向へ向かって一周し東口にいるレッド・ブランケット・マン<sup>30</sup>にパイプを3回渡す振りをして4回目に渡す。パイプを受けとったレッド・ブランケット・マンは中央でパイプを4方向、空、大地へ向けて、それぞれが象徴する力に対

して祈りながらタバコを詰める。そしてそれを、西口の祭壇の所にいるホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンに渡す。整列してそれを見守っていた全てのサン・ダンサーは、それを合図に、西口から入場する。その際、早朝に祈りを込めてタバコを詰めておいた各自のパイプを、入口そばのパイプ・ラックに掛けて入る。ダンスは2日目から3日間行われるのだが、2日目の踊りは12ラウンド、3日目も12ラウンド、4日目が8ラウンドある。各ラウンドの始まりは、レッド・ブランケット・マンがパイプを詰めてホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンへ渡す儀式で始まる。ダンスの間中ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンはパイプを持ってアーバー西側の定位置で踊る。ラウンドが終わるごとに、パイプはホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンより列尾の男性ダンサーが受け取り、東口外にいる別のレッド・ブランケット・マンへ渡す。そのパイプは、南口に円陣を組んで大太鼓を叩きながら歌うシンガーやドラマーが、歌い続ける力を祈念して、ラウンドの合間に吸う。サン・ダンサーは各日の最終ラウンドを踊り終わってから、一日の踊りにより祝福されたパイプをラックから受け取り、後でそれぞれ祈りながら吸う。ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンはサン・ダンスの間中皆の踊りと祈りを証人として見守る。

最終日である4日目の最終ラウンドは、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンが東口よりアーバーを出て、ローブを脱ぎ捨て丘のかなたへ消えていくことにより終わり、サン・ダンスはこれをもって終了する。このようにサン・ダンスはホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの到来に始まり、帰還により終わる儀式なのである。<sup>31</sup>

サン・ダンスにおけるホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンが果たす象徴的役割や多くの語りが語り継がれていることは、今なお彼女がインディアンの人たちに大きな力を与えているということにほかならないだろう。そこで、最後に彼女が今我々に語りかけているメッセージが何なのか考えてみよう。

## V おわりに

何度もその言を引用してきた *Lame Deer* はビジョンの探求者 (*Seeker of Visions*) とも言われているのだが、彼は、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンのビジョンを4回見ており、彼の受けた偉大なビジョンは彼女からのみ来たと断言している(214)。そして、もう一人、そのような人にインディアンの世界観を広く伝えるのに大きな働きをしている *Brooke Medicine Eagle* がいる。彼女は、現在を未来へと繋ぐ基礎となり得るような真理を求めて、時代を通して有効でありうる古代の真理を模索した結果、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンから教えを受けたとして、それを分かち合うために『*バッファロー・ウーマンが歌いながらやって来る (Buffalo Woman Comes Singing)*』を書いた。彼女はホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンが今もビジョンを送ることによって、ラコタの人達と話し続けていると言う。

そのビジョンは、皆が調和して生きるように新たな強力なる儀式で人々を導き、祝福を与えるようなビジョンである。彼女は、... 我々自身のために、また、次世代の子供達のために、母なる大地の名において深い共生の生活を送るように我々に呼びかけている。... この

バッファロー・カーフ・ウーマンの話は我々が“縁あるもの全てと”一つになる小さくはあるが、重要な教えである。(6-7)

彼女のメッセージやインディアンの精神性において中心をなすものは、大いなる霊が全てのものに生きており、全てを活性化し、創造の全領域における全てのものにエネルギーを与えてくれるということへの理解、また、そこから来る敬虔さであろう。後に啓示されると言われ、現在も聖なる儀式として行われている儀式や、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの到来を、神学的枠組みの中に統合し、昇華し、記録させた Black Elk の功績は大きい。カトリック教徒に改宗し、その教理を教えることさえした彼が、これを今伝えなければ、永久に失われてしまうという思いに駆られて語ったのであろう。<sup>32</sup>

今日、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンは、民族を超えて、豊かさや便利さの中に潜む非人間性に疲弊した現代人や、大地にあるものをむさぼり尽くすことはもはやできないことに気づいた現代人に、母なる大地にあるもの全てが限りなく尊く、繋がりがあっているのだということ語り続けている。ラコタ・スー族から発祥したサン・ダンスは、筆者が参加しているものに関しても、チプワ族、シャイアン族、ナバホ族、セーリッシュ族、メティなどが参加して汎インディアン儀式となっている。また、異論を唱える人はいるが、白人、黒人、黄色人種まで加わり、全世界の者を繋ぐ平和の祈りの儀式となっている。インディアンの精神世界のリーダーにより、4色の人種が参加するサン・ダンスのビジョンを見たと言うことが語られ、実際にそのようになってきているのである。ここで、この論をインディアンの人達と同じに「縁あるもの全てに。(All my relations.)」で閉じる。

#### 注

- 1) この伝承は通常インディアンの伝説とか神話とかに分類されているが、全ての生命・存在の根元である創造主からもたらされたことにより大いなる霊や全ての霊との交わりが結ばれ、現在もビジョンを送り続けている語りには適切ではないと考えるので、本稿ではラコタ族にとっての“聖なる伝承”とする。
- 2) 浜由美子「現代に生きる北米インディアンのスエットロッジ」『十文字学園女子短期大学研究紀要』第29集 1998年 67-77頁参照。
- 3) 自らラコタ族と名乗っているこの部族は、オグララ・スー(Oglala Sioux)族とも言われ、同盟によりスー族と総称して呼ばれる7部族の一つであり、サウス・ダコタ州の Pine Ridge インディアン居留地に住む。Severt Young Bear & R. D. Theisz, *Standing in the Light: A Lakota Way of Seeing*, xxvii 参照。
- 4) 本稿では — — の間の空所部分は筆者の補足部である。
- 5) ワカン・タンカは、大いなる神秘という意味であるが、具体的には諸説があり、6つの祖父や力、即ち、4方向、空、大地を象徴しているという説(DeMallie:1984, xix 及び McGaa:1995,8)や、16の聖なるワカンからなり、非人間であるが、人間の特性を持っており、太陽、月、風、雷、大地、岩、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマン、その他の目に見えない霊であるという説(DeMallie:1984,81)などがある。浜由美子、1998年 75 注7も参照。
- 6) ホワイト・バッファロー・カウ・ウーマンとかカーフ・メイドゥンとか呼ぶ場合もあるが、本稿では、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンに統一した。

- 7) Paul Goble による *The Legend of the White Buffalo Woman* (1998) などがありインディアンの伝統教育のクラスなどで使用されている。
- 8) 「聖なるパイプの贈り物」の訳は筆者の拙訳。
- 9) ラコタの祈りにおいて、鷲は、バッファローと同じくらい重要である。空高く飛ぶ斑点鷲は、故郷を遠く離れた勇者のように人々の守護者となるという意味があり、その羽は、ラコタのこの守護者としての勇者の側面を表している。斑点鷲は、イヌワシ (golden eagle) の幼鳥と言われるが、ハゲワシ (bald eagle) の幼鳥であるという説もある。Julian Rice, *Black Elk's Story: Distinguishing Its Lakota Purpose*, 142-43参照。
- 10) これは、ラコタ語で Mitakuye oyas'in. であり、英語で All my relations. とも訳す。祈りやスピーチの最後、及び、ワカン・タンカの前に自らをへり下る時言う。
- 11) ボウルの材質と同じこの石は、ミネソタ州西部のパイプストーンという所でのみ取れる catlinite という赤石である。現在インディアンしか採掘できない。
- 12) 赤い道 (Red Road) というのは、インディアンとして正しい生き方をする事である。浜由美子, 1998年 76 注15参照。
- 13) これは、Keeping the Soul, Rite of Purification, Vision Quest, Sun Dance, Making Relatives, Girl's Puberty Rite, Throwing the Ball という7つの儀式のことで、*The Sacred Pipe* でそれぞれ章を割いて説明している。Black Elk は2番目の Rite of Purification と3番目の Vision Quest はホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンの到来以前からあった儀式だと言っており、D. M. Dooling の神話の中にも出てきている。ただ、彼女の到来以降、パイプの儀式がさらに加わったのである。(Brown, 7注12) この中で現在行われているのは、Rite of Purification (現在 Sweat Lodge と呼ぶ)、Vision Quest, Sun Dance である。
- 14) Keeping of the Souls の儀式である。*The Sacred Pipe* の2章前半でさらに詳しく語られている(10-18)。
- 15) 通常亡くなってから、一年後である。*The Sacred Pipe* の2章後半に詳しく述べられている(19-30)。
- 16) ラコタ族の神話では、4つの時期には2つの意味があり、昼、夜、月夜、一年(4方向の設定によりもたらされた4季節)という時の意味(Dooling, 114)と、次の意味がある。サイクルの始めには、バッファローは西にいて、水を押し留めていたが、毎年毛が一本抜け、一時期毎に足が一本無くなる。毛も足も無くなったときに、水が押し寄せてきて、サイクルは終わりになると信じられている。現在は、1本足で、ほぼ禿げていると言われている。(Joseph Epes Brown, 9 注15)
- 17) この語りは2つ記録されている。John G. Neihardt が *Black Elk Speaks: The Legendary "Book of Visions" of an American Indian* (1932: 3-4) にあげた語りは二人の狩人とパイプの到来のみを記した非常に簡単なものである。この著者への Black Elk の語りの記録を忠実に拾い直して編集したものが Raymond J. DeMallie の *The Sixth Grandfather: Black Elk's Teachings Given to John G. Neihardt* (1985: 281-85) であり、ここに挙げたものはそれである。
- 18) この出来事は他にもいくつかの伝承話に出てくる。Raymond J. DeMallie: 1984, 285 注5参照。
- 19) 語りの①~④は、筆者のまとめである。⑤~⑩は、Paul B. Steinmetz, *Pipes, Bible and Peyote Among the Oglala Lakota: A Study in Religious Identity* (54-57) の要約である。出典の詳細に関しては同文献参照。
- 20) これは、後述のサン・ダンスにおけるパイプの渡し方を見ると分かるが、今でも儀式でパイプを渡す際に行われている慣習である。
- 21) このラコタ神話は、少数のシャーマンにのみ語り継がれてきたことを医者 James R. Walker が 1895年から採録して記録したものを基に、D. M. Dooling が整理して纏めたものである。*The Sons of*

*the Wind : The Sacred Stories of the Lakota* 参照。

- 22) Black Elk は37歳の時にカトリックに改宗した。迫害から部族を守るため、また、居留地での生活への彼らの適応を助けるためであった(Rice, xi)だろうと思われる。
- 23) 7つの儀式の中で、2つはすでにあったと Black Elk 自身自らの話の矛盾を認めていたわけであるが、サン・ダンスに関してもそれは、アラパホ(Arapaho)族から伝わったという説(Steinmets, 56)もある。
- 24) 19世紀後半からの政府の同化政策により、インディアンの伝統的信仰、儀式、習慣などが禁止された時代において、伝統的信仰はキリスト教の枠組みの中に入れることにより存続できたとし、宣教師からすれば、キリスト教の枠組みの中に伝統的信仰を取り入れることにより改宗者を獲得できたということがある。例えば、パイプをキリスト、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンをヴァージン・メリーと同一視する説(Demallie : 1987, 14)もある。また、19世紀後半まで、口承だけで語り継がれてきたこともあり、ラコタ神話やモホーク神話などから、キリスト教の影響をどの程度に受けたか実証することや、それを切り離すことは難しいと友人の長老は語っている。
- 25) Fools Crow は、「パイプの到来時期を1700年以降という人が多いが、自分は1200~1500年の間だと聞かされたし、そういうビジョンを見た。」(Mails, 55)と言っている。
- 26) パイプラックというのは、樹皮を削り取った山桜系の木 (chokecherry) の材の縦棒二本を少し離して地面にしっかりと固定させ、その先の二股になっているところに横棒を掛けたラックである。
- 27) これは、ブリティッシュ・コロンビア大学の「第一民族学習ハウス (First Nations' House of Learning)」で行われたもので、パイプを浄める儀式、スエット・ロッジ、祝宴、ギブ・アウェイという一連の儀式を伴うものである。正式には、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンがパイプを持って到来するところから始まる。
- 28) Fools Crow は、パイプを正しく使えば信じられないような助けを得られるので、パイプは世界存続の鍵になる (Malis, 54)とまで言っている。
- 29) これは、Eagle Society のサン・ダンスである。ノース・ダコタ州の Turtle Mountain 居留地で、ある指導者のビジョンに従って、6年前に始まった。各種儀式が汎インディアン儀式となっているので、民族と関係なく、所属する家紋 (family crest) の儀式などに参加するようである。この居留地では、他に Turtle Society のサン・ダンスもある。また、筆者は、パイプは使用するが、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンが登場しないサン・ダンス (Blood Reserve, Alberta) にもサポーターとして参加したことがある。
- 30) 通常6名ほどのレッド・ブランケット・マンがいるが、この人達が儀式を司り、ワカン・タンカへ我々の祈りを届ける仲立ちをしてくれる。4年目のサン・ダンスにおいて、献身的働きにより相応しいとされた4名が新しいレッド・ブランケット・マンになるブランケット贈呈の儀式があった。ブランケットを贈られることはインディアンにとり最高の荣誉である。
- 31) サン・ダンスにおける最大のタブーの一つは、ホワイト・バッファロー・カーフ・ウーマンのみが出入りする東口やその方向を、北から南へ、あるいは、その逆へ横切ってはいけないということである。
- 32) John G. Neihardt, *Black Elk Speaks*, xi 参照。

#### 参考文献

- Allen, Paula Gunn. *The Sacred Hoop : Recovering the Feminine in American Indian Traditions*. Boston : Beacon Press, 1986.
- Brown, Joseph Epes. *The Sacred Pipe : Black Elk's Account of the Seven Rites of the Oglala Sioux*. New York : Penguin Books, 1981 (1953).

- DeMallie, Raymond J., ed. *The Sixth Grandfather : Black Elk's Teachings Given to John G. Neihardt*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1984.
- DeMallie, Raymond J., and Douglas R. Parks. *Sioux Indian Religion : Tradition and Innovation*. Norman : University of Oklahoma Press, 1987.
- Dooling, D. M., ed. *The Sons of the Wind : The Sacred Stories of the Lakota*. Denver : Colorado Historical Society, 1992.
- Drysdale, Vera Louise, ed. *The Gift of the Sacred Pipe*. Norman : University of Oklahoma Press, 1982.
- Freesoul, John Redtail. *Breath of the Invisible : The Way of the Pipe*. Wheaton : The Theosophical Pub. House, 1986.
- Goble, Paul. *The Legend of the White Buffalo Woman*. Washington D. C. : National Geographic Society, 1998.
- Hassrick, Royal B. . *The Sioux : Life and Customs of a Warrior Society*. Norman : University of Oklahoma Press, 1964.
- Holler, Clyde. *Black Elk's Religion : The Sun Dance and Lakota Catholicism*. New York : Syracuse University Press, 1995.
- Lame Deer, Archie Fire, and Richard Erdoes. *Gift of Power : The Life and Teachings of a Lakota Medicine Man*. Santa Fe : Bear & Company Pub., 1992.
- Malis, Thomas E.. *Fools Crow*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1979.
- McGaa, Ed., Eagle Man. *Mother Earth Spirituality : Native American Paths to Healing Ourselves and Our World*. San Francisco : Harper Collins Pub., 1990.
- McGaa, Ed., Eagle Man. *Native Wisdom : Perceptions of the Natural Way*. Minneapolis : Four Directions Pub., 1995.
- Medicine Eagle, Brooke. *Buffalo Woman Comes Singing*. New York : Random House, 1991.
- Neihardt, John G.. *Black Elk Speaks : The Legendary "Book of Visions" of an American Indian*. New York : Pocket Books, 1975(1932).
- Powers, William K. . *Oglala Religion*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1975.
- Rice, Julian. *Black Elk's Story : Distinguishing Its Lakota Purpose*. Albuquerque : University of New Mexico Press, 1991.
- Long Soldier, Tilda and Mark St. Pierre. *Walking in the Sacred Manner : Healers, Dreamers, and Pipe Carriers - Medicine Women of the Plains Indians*. New York : Simon & Schuster, 1995.
- Steinmetz, Paul B. . *Pipe, Bible and Peyote Among the Oglala Lakota : A Study in Religious Identity*. Knoxville : University of Tennessee Press, 1990.
- Walker, James R., Raymond J. Demallie, and Elaine A. Jahner, eds. *Lakota Belief and Ritual*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1980.
- Young Bear, Severt, and R. D. Theisz. *Standing in the Light : A Lakota Way of Seeing*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1994.
- 浜由美子 「現代に生きる北米インディアンのスエットロジ」『十文字学園女子短期大学研究紀要』第29集 1998年 67-77頁